

立山芦峯寺、岩峯寺の宿坊が所蔵した「誕生石」について —近世本草学での弄石と「神代石」の認識をもとにして—

吉野 俊哉

はじめに

自然界への好奇心の高まりを背景に、天産物の観察と記載が重視されるようになった近世本草学には、二つの側面があった。一つは天産物を新たな産物資源の開発につなげようとした物産学と呼ばれた分野であり、もう一つは、精神世界の豊かさを求めた博物愛好家たちによる、学芸活動の広がりである。前者の事例には、享保以降の幕府による物産政策に見られる採葉使派遣や、全国的な物産調査の実施等が挙げられる⁽¹⁾。その一方後者には、長く太平の時代が続く中、大名から庶民に至るまでが観賞用の園芸植物や金魚などの珍種を求め品種改良に関心を寄せたことや、各地に産出した珍奇な石類の収集に関心を高めたことなどが挙げられる。

小論では天産物の中でも特に石類の扱われ方に焦点を当てていく。近世中期以降、それらの形状や産地などの記載が蓄積されていくとともに様々な石類を収集し玩弄する趣味が広がり、それに執心した人々（以下、弄石家と総称）の活動が各地で見られるようになった。彼らは近江の木内石亭（享保9年〈1725〉～文化5年〈1808〉）を中心として、コレクションの交換や絵図の模写を通して幅広いネットワークを形成するようになったが、これは近世本草学の学芸活動展開で重要な部分だったと思われる。

彼らの対象は、珍石・奇石とされた形状や色が珍しい岩石・鉱石類や化石が多かったが、その他に今日では考古遺物に分類される、天産物か人工物か未詳の石器類も含まれた。これは広義に「神代石」と呼ばれたものであった。当時それらは、山野で地中から出現する、好奇心がそそられる奇石として本草学の範疇で記載されていた。そこで蓄積された情報には明治以降の近代考古学の成立以降、考古遺物に関する研究にも資するものがあつた。

筆者は令和元年度後期特別企画展に併せて近世本草学での石類の扱われ方に注目し、越中・立山に関連する具体的な事例を調査した。その中で、信州飯田の本草家市岡智寛（元文4年〈1739〉～文化5年〈1808〉）が、種々の書物や見聞から本草学関連の幅広い情報を書き留めて備忘とした手控え帳『玄経集』⁽²⁾、及び各地の弄石家が所蔵した石類の絵図を転写して作成した『天下諸名家所蔵之奇石異物図』⁽³⁾（卷子表紙に「珍石図」の名称がある。以下、『珍石図』）の中に、当時立山芦峯寺と岩峯寺の宿坊にあつた、「誕生石」の名称がある石器の絵図2点を確認した。これまで立山の宗教施設との関連を示す石器類の情報は管見したことがなかったので、この絵図は非常に興味深いものであつた。

この絵図を描いた市岡智寛（以下、智寛）は本草学に詳しく、千野陣屋に手代として勤めながら江戸中期から後期にかけて各地の弄石家たちともつながりを持った知識人であつた。智寛の交友関係を示すように前掲の史料には木内石亭（以下、石亭）、及び石亭と関係が深い飛騨高山の二木長嘯、津野滄洲らの弄石家が所蔵した神代石の絵図も含まれている。それに加えて、越中に在住した弄石家笹倉清兵衛自清（以下、自清）の所蔵品、或いは自清から情報を得て転写した石類の絵図も多数含まれていた点が注目される。これまでほとんど知られることがなかつた、越中での弄石家に関する事情を知る上で貴重なものと思われたからである。

そして芦峯寺や岩峯寺の宿坊が所蔵した石器類の記載は、その時代の弄石家たちと立山との情報のつながりや、それらが「誕生石」と呼ばれていたことから、信濃や飛騨に類例が見られる石器に安産祈願をする信仰と立山での宗教活動とに何らかの関連があつた可能性を伺わせるものであつた。

そこで小論では、まず近世本草学展開と、石類を収集し玩弄する趣味の中で弄石家たちが神代石と呼んだ

石器類の位置づけを整理する。その上で、『玄経集』の記載とともに同時代に模写された種々の絵図に描かれた石器類の情報を照合することで、石類の収集、玩弄をめぐる情報や人の交流、そして「誕生石」と呼ばれた石器と立山の宿坊家での宗教活動とが関連する可能性について論じたい。

1. 近世本草学展開の中での石類

1-1 近世本草学展開の独自性

近世本草学の独自性では、概ね2点が指摘される。1つは中国伝来の文献の記載のみを盲信せず、目の前にある国内の天産物を実地に探索し、それによって当時の様々な人々の自然理解を深めるものであったこと。もう1つはオランダを通して西洋の博物的な知識が入って来てはいたが、西洋科学が目指した天産物の体系的な分類や実験を通じた分析、法則性を追求する意識が欠如していたことであった。西洋博物学との違いは、日本の本草学があくまで人の生活や産業に結びつく実学であり、それに資する幅広い知識を蓄積する方向に発展した点にある。

近世本草学は、分析や分類の体系を持たず好奇心の赴く対象への間口が広がったことで、高度な知的訓練を受けた専門家だけでなく好奇心と関心を持った者は参加可能な、情報を持ち寄って討論しながら愉しむアマチュアリズムに支えられていた。これが趣味的な学芸活動の展開を広げたとと言える。また、これを近世本草学の特徴として、生活や文化を通じた「人の視点」から眺めた自然理解であったとも指摘される⁽⁴⁾。

体系を持たないということは、現代の視点から見ると雑多で非常に掴み所がないものに見える。しかしそれを肯定することで、近世本草学とは天産物（自然界）を人が豊かに暮らす上にどう資するかという視座から理解・利用しようとする諸活動と、そこから得られた知識の集合体だったと見ることができる。但し、ここでの「人が豊かに暮らす上」とは、生活に直結した健康面や経済面等の効用だけではなく、長く続いた太平の時代を背景とした知的好奇心の充足や文化的教養、心の豊かさを満たす手段でもあった。例えば江戸後期に見られた、朝顔や菊や万年青、桜などの品種改良を繰り返して珍種を求める園芸ブームもこの文脈の中で見ることができる。「花合わせ」のような会が催され、所蔵の品を見せ合って自慢したり競い合ったりする同好者の組織的な趣味の集まりが発生することで、裾野が広がるとともにレベルも向上していった。

石類を玩弄する趣味の展開もまた、これらと同様の文脈の中で捉えられるものである。

1-2 本草学が対象としてきた石類

もともと薬に関する実学であった本草学での石類の認識は、本草書に基づく「石薬」の知識であったと考えられる。紀元前後～後漢前期頃に成立したとされる中国最古の本草書『神農本草経』に収載する365種の生薬の内、鉱物性と見られる物は41種ある⁽⁵⁾。しかし薬物をその作用から上薬・中薬・下薬の三品に分類したその時代の分類の中には、考古遺物や人工物に相当する記載はない。そして時代を経ると、石薬に関する知識の増加や博物的な内容が増加していった。16世紀明代に作られた博物誌的本草書『本草綱目』では、石類は土部・金石部・石部に分類され、様々な鉱石や岩石については博物的な内容も含めて200種あまりが収載されている。その中には「古鏡」「古文銭」「銅弩牙」「諸銅器」といった明らかな人工物も含まれているが、その記述は天産か人工物かの区別に重きを置くのではなく、素材となった物質の薬効に目が向けられていたようである。『本草綱目』の中で、後に近世本草学に現れる「神代石」に相当する記載は、わずかに「霹靂礧」、「雷墨」（石部卷之十）などの名称が見えるのみである。

近世以降、本草家が身近な山野で実地に産物の調査をするようになると、中国の本草書を下敷きにしつつも国内に産する様々な動植物、鉱物などを加えた本草書が作られるようになる。例えば『大和本草』（貝原益軒、宝永6年〈1709〉）では、石類は金玉土石に分類する中で67種が収載されるとともに、『本草綱目』には記載がない「和産」を11種⁽⁶⁾加えている。その内の「人肌石」「観音石」「饅頭石」「天巧碁石」「木ノ

葉石」などは、説明から推定する限り石薬を解釈したものではなく博物的な見地から採られているもので、それらは後年盛んになる物産会や薬品会など（以下、これらの会を、物産会等と総称）でもよく出品されたものである。益軒がこれらを和産天産物として収載したことに、その後に珍石奇石を拡大的に本草学の範疇で解釈する基があったように思われるが、逆に『本草綱目』には記載されていた「霹靂礮」がそこから省かれている。益軒の理解ではこれを和産に同定するのが難しく、日本に産しない物との判断があったのかも知れない。

さらに『本草綱目啓蒙』（小野蘭山、享和3年〈1803〉）で石類には195種類が記載されているが、そこに付けられた説明は飽くまで『本草綱目』で挙げているものに国内の産地、名称、形状などの解説を加えた内容である。

本草学は実学であるから、近世中期以降は対象とする天産物は物産学への傾倒が見られ、物産会等に出品される石類は鉱物や特徴的な形状がある自然石が中心であった。それに対して、霹靂礮に類する石器類は理解が進んでいるとは言い難く、雷斧や石鏃の出品が数点見られるだけといったことが多かった。管見した物産会等の目録を例にすると、東都薬品会での出品物から選抜して記載した『物類品隲』に載せられたものは石弩1点のみ。その他には「石斧」、「石弩」（『赭鞭余録』⁽⁷⁾、宝暦11年〈1761〉）、「雷斧」（『躋寿館薬品会略目』⁽⁸⁾、文化年間）、「石弩ヤノ子イシ」（『本草会物品目録』⁽⁹⁾、天保4年〈1833〉）などがあるだけである。ただ、幕末に定期的に継続して物産会を開催していた京都の山本読書室では「雷斧」や「石弩ヤノ子イシ」、「石弩」の他に「曲玉」、「管石」、「車輪石」、「天狗飯ヒ」などの出品も見られる⁽¹⁰⁾。

それでも、鉱物や岩石そのものを分析して生成や属性など体系づける、科学的な鉱物学への展開は見られず、西洋科学にあった「自然界を整理して体系化する」という発想が近世本草学にはなかったという指摘は、鉱石類に対しても当てはまるものであった。

小括すると近世の鉱物・岩石類の知識は、中国伝来の本草書の記述に和産天産物を加え、国内の産地、品質などを記載するとともに、蘭学を通じて西洋から伝わった石薬の記載に範囲を広げたものであった。その中でも江戸中期から台頭してきた物産家の目は、鉱物資源や物産開発の方を向いていた。石器類が天産か人工かといった分類には向けられず幕末にかけて開かれた物産会等でも、石器類の出品に特筆するものが見当たらないのがその証左であろう。

このように、物産学的な本草学では石器類に対する認識が広がっていかなかった実態を読み取ることができる。この展開が、熱心に石類を収集し、その成因にも興味を持っていた石亭にとっては、違和感や不足を覚えさせていたものと想像される。

1-3 弄石の実態と弄石家の位置づけ

石類への理解が広がっていく背景には奇石珍石収集の流行があった。形や色が珍しい石、美しい鉱物結晶などの収集（このような趣味を指す総称として以下、弄石と言う）は現在でも盛んである。だがこの時代に、この趣味がその幅を広げるのは、物産学に傾いていた本草学を学ぶことで博物的な見識を広げつつも、そこの石類への理解に満足していなかった石亭が、独自に石類を愛玩する同士に呼びかけて連帯した「弄石社」の活動を牽引していったことが大きいであろう。石亭の活動とともに使われる弄石という言葉は、文字通り石を弄ぶことを指すが、植物や動物など天産物全般を対象にする本草家たちが石類を扱ってもこの言葉があまり用いられていないのは、弄ぶという趣味的な学芸活動と物産学的な傾向が強まった本草学とには既にギャップがあったからであろう。

石亭は『雲根志』前編巻之五「二十一種珍藏」の項で「予十一才にして初めて奇石を愛し、今に三十年来昼夜これを翫びて他事なし」、また『神代石之図』の序文で「予奇石を翫ぶ事多年」としているように、興味ある奇石を翫ぶというところから弄石に対して思い入れを持っていたようである。この名称を冠して石亭が各地の同好者に組織化を呼びかけ「弄石社」を結成するが、後年「かつて弄石の社を結んで既に数百人」

と書いているように、この熱心な石類収集家たちの活動は個人的趣味に止まらず、日本での石類の博物誌に貴重な業績を残すことになる。

石亭がこのような行動を起こすのは、弄石に人一倍強い愛着を持っていたことに加え、何度も大坂や京都で開かれた物産会等に出品、出席していた⁽¹¹⁾ように、本草学を学ぶ中で体験した物産会等の開催に強く影響を受けたためと思われる。

学芸活動としての弄石が流行していった背景にも、物産学の隆盛や各地で物産会等が開かれ、「モノ」を通して広く情報交流を行う機会の広がったことがあるだろう。例えば、江戸では田村藍水のもとで学んだ石亭は、平賀源内が主導して開催した東都薬品会では取次所を引き受けて⁽¹²⁾運営に協力していた。それを通して石亭が得たものは、野外での採集の重要性や物産会等に見られる、モノを対象に人々が集い、情報を交換するシステムだったと思われる。そしてこれが、後年石類に出品を限って開いた物産会としての「奇石会」を催した際にも生かされていったはずである。本草学が持つ、膨大な動植物鉱物の物産情報の中から「石類」を独立したカテゴリーとして特化して分離独立させ、殖産興業へ向かった物産学的な石類の理解とは別に、石亭が元来持っていた「石を遊ぶ」という趣味的な学芸活動の深化を標榜して同好者による活動へと進んでいたことにそれが現れている。そしてこの、石亭の呼びかけに賛同する弄石の隆盛は、飽くまでも趣味の範囲から教養や心の豊かさを求めようとする学芸活動展開の流れであった。

石亭たちの弄石では、収集する石類を自ら山野で採集することもあったが、お互いが訪問し合い所蔵品を紹介したり、相手の所蔵品を見て説明を受けたりすることが多かった。その際には所蔵品を持参したり、絵図を描いて持ち歩き、それを見せ合って討議したり、模写したりして情報を交換していた。そのような絵図は、それぞれの弄石家たちがどんな石類に興味を持ち収集していたかを知る重要な資料であり、そうした各地の弄石家が描いた絵図の、模写関係の系統に関する研究もなされている⁽¹³⁾。また残された弄石家の日記や書簡などからは、訪れた弄石家の名前やその日時、やりとりの内容が分かり、交友の範囲が把握できる。石亭を中心に見れば、各地に在住する弄石社のメンバーとの交流、特に飛騨高山の二木長嘯との書簡⁽¹⁴⁾からは収集品の交換や贈与、討議の内容などの実態がわかる。

その他には、奇石商人と言われる商人たちからの購入もあった⁽¹⁵⁾ようだが、そのような売買が成り立つほどに弄石の隆盛していたことがわかる。

ところで、小論では石の収集を趣味とする者たちを弄石家と総称したが、この言葉の曖昧さも指摘しておく必要があるだろう。「弄石家」の語は『雲根志』の刊行とそれによる豊富な石について知識が浸透すると相俟って広がり一般化したと見られるが、石亭を中心とした弄石社の活動に賛同して共に活動していた関係者のみを指したとすれば、厳密には弄石社の関係を結んでおらずに石類を玩弄する者は「弄石家」と呼べないだろう。ほぼ同じ意味で使われている「愛石家」という別の語も見られるからである。

2. 本草学での石器類の認識

古来本草学では、石器類などの出土遺物の類には天産か人工か明確な説明は見られず、中国では古くから雷と関連付けた見方がなされた。それは、しばしば雷を伴う雨で表土が流れた後に出現して、それまで地表になかった石器類が採取されることが多いという経験の蓄積から、その類の石は雷が変化して生成したものと見なして「霹靂礧」と名付けられたような事例である。

石薬とは出自が違うため、三品に分類し記載する古代の本草書にはこのような物は記載されていない。博物的な内容が充実する『本草綱目』でも、李時珍は古文獻にあるそのような記述をそのまま引用し、「霹靂礧」の名を挙げて「この物は落雷した場所を確めて三尺深さに掘下げて取る。その形は一定せぬが、斧刀や剗刀に似たものがあり、二箇の孔のあるものがある。(中略)落雷後に多く取れる。斧に似て青黒色で斑文があり、玉のように至つて硬いといふ。(後略)」⁽¹⁶⁾とした上で、同類の物には材質、形状、重さなどによる差異をつ

け「雷楔」「雷斧」「雷礎」「雷鏹」「雷鑽」「雷環」「雷珠」などの名称を載せているに過ぎない。これが、本草学での石器に対する基本的な見方となって引き継がれていった訳である。

日本では「霹靂礎」に磨製石器の類を同定しているが、その成因には依然具体的な考察はない。『本草綱目啓蒙』（享和3年〈1803〉）の「霹靂礎」の項では、「狐ノマサカリ」「テングノマサカリ」の和名を当て「其形扁平ニシテ墨ノ如シ 本ハ厚ク末ハ薄シテ刃アリ 匏ノ形ニ似タリ 小ナル者ハ長サ一寸余大ナル者ハ長サ六七其石堅ク肌緻密（中略）其色一ナラズ 或深黒或浅黒或灰色或青色或褐色（中略）形状異ナル者数品アリ各ソノ形ニ因テ名ヲ異ニス 皆東北州雨後山中崩土間ヨリ拾ヒ得 或ハ田野ニテモ得凡石磐アル地ニコレアリ 奥州羽州能州信州越後濃備前ヨリ出ツ」とする。当時各地で出土があったことが分かるとともに、形状の的確な観察で広く産地情報の収集はなされているが、この時代の本草家は、石器類を分類しその成因に言及することはなく金属や石薬と同じ括りで見ている訳で、石亭らが伝統的な本草学に拘泥せず石類の分類に向かったこととの違いが顕著である。

このような流れを見ると、物産学の面が強い近世の本草学では、石器類については『本草綱目』に挙がる品目以上にはほとんど幅が広がっていなかったことが分かる。一方、中国本草学には見られなかった「神代石」の概念が認知され、後年の物産会等でも石器類が出品されるのは、石亭が中心となった弄石社の活動と「奇石会」の開催に負うものと見られる。

各地の本草家による物産会等の開催が、博物誌への関心の広がりによって頻繁になってからも、石器類の出品が限定的であったことは先に述べたとおりである。但しその中で富山藩薬品会（嘉永6年〈1853〉）では、全出品数211点に対して石器類の出品数やその種類が非常に多く見られた点や、「神代石」の名称が、総称ではなく勾玉、石斧、石鏹などを除いた呪術石器などを指して狭義に使われていた点で例外的な特徴があったことを付記しておく。

『富山藩薬品会目録』にある石器類の具体的な出品は、

石磐（富田安之丞）、曲玉、管石、霹靂礎、神代石上品二品（若土武太郎）、神代石船形、大曲玉、神代石二品（興津里庵）、自然石冠形石（渡辺文伯）、飛州雷斧（岡田専達） ※（ ）は出品者

であった。これを見ると、時代的には『雲根志』三編が刊行されて半世紀以上が経っており、石器類を示す様々な個別の名称が地方でも認知されていたように思われる。それに対して、同時期の江戸や京都、尾張などでの物産会等では、一度にこのように多種の石器類の出品は見られないので、ここには何らかの地域的な要因があったことが推定される。例えば、越中は磨製異形石器の出土が比較的多い信州、飛騨とも地域的に近く、弄石家の間で様々な形状の石器類を目にする機会が多くなり、それら存在が比較的広く知られていたのではないかと考えられる点。また出品者の多くが藩医や藩主前田家の縁者⁽¹⁷⁾であった。そこに本草学に関心の高い藩士たちと日常的に本草学サークルを開き、また薬品会開催の中心にいた富山藩10代藩主前田利保の影響を考えれば、出品された石器類の多さを見る限り、越中でも弄石が盛んだったことも想像される。その中で、石器類の収集に執心していたと見られる越中の弄石家については後述する。

3. 木内石亭の「神代石」の概念

本草学では天産物を対象としてきたので、採集した石類についても産地や外面的な形状を記載することが重要であった。一方で本草書の記載には瓦、古銭などのような明らかな人工物も含まれていたが、分析的にその成因や製法を掘り下げた考察は視野に入っておらず、石器を取り上げて人工物か自然物かを論じたり、製造技術に言及したりするものではなかった。

その中で「神代石」とは、弄石社のネットワークを通じて蓄積された様々な珍石奇石に関する情報を元に、その特異な形状から、それが天産か否かとの疑問を考察することから生み出されてきた概念であろうと思われる。本草書に記載がない物に新たな価値を与えることは、本草家にとってはその依拠する概念と一線を画

すことでもある。だから、それが本草家からではなく、やはり一線を画した弄石家の立場からなされたものだったことにも意味があったと言えるだろう⁽¹⁸⁾。

「神代石」の語は、神代の時代の石として、用途が理解不能な石器類を便宜的に呼んだ名称だったが、その名称がいつから使われていたのか明確ではないようである。

ただ、この概念ができて認知されていく背景には、次のような前提があったものと考えられる。

- ①「神代」とは具体的な年代ではなく、人知を越えた遙か古代の神話世界として想定されており、そのため、人間にはその用途が理解不能であるとともに、形状や技巧も人事を超えて精緻で優れた、神々の創造物⁽¹⁹⁾であろうと考えられた。
- ②人工物、自然物（天産物）に対して第三の創造物（神が作った）の概念の創出であった。そのため、論証が不可能な、神代の存在を信じるか否かの視点であり、そこには民間信仰にもつながる要素も内在していた。
- ③弄石家たちに石器類を天産物ではないと見なし、その成因を分析する視点が生まれた。これは本草学ではあまり見られない、分析的な見方の萌芽であった。少なくとも、その種の物が純然たる天産物ではないという認識が理解され始めた。
- ④この概念は中国の本草学には明確に見られないものである点、近世日本での本草学独自の展開を示す事例である。一方で石亭以前には、『本草綱目』で説明する「雷に成因がある」とする説や、それに基づく「霹靂礮」の存在に準拠して解釈するのは、『本草綱目』を基軸とした近世本草学の限界を示すものでもあった。

これらを踏まえた上で、「神代石」の概念と、この語の使われ方をまとめると次のようになる。

- ・この語自体は山野での観察を重視する、近世本草学の博物誌的な知識の中から石類の採集、情報の蓄積による石類観察の類型化から生み出された概念である。物産学的な本草学からこの概念が分離する中心になった石亭の造語か、或いは弄石家たちの間で使われていた言葉が、石亭の持つ経験と見識によって定義され、その影響力で広がっていったものであろう。
- ・当初は、本草家が石器類の範疇で認知できていた「霹靂礮」「雷斧」「矢の根石」「勾玉」「雷環」「雷鑽」などを除き、理解不能な呪術石器などを指す便宜的な名称であった。**（狭義の神代石）**。
- ・後年、この語は自然石に対して石器類の総称としての名称**（広義の神代石）**で使われることもあり、両者の混用が見られる。石亭は著書の中で概ね狭義に使っているが、形状などを元に既に名称が付けられた石器であっても、用途が未詳なものに対しては神代石と呼んでいる場合があることから、「神代石」が相対的な名称であったことを示している。恐らく石亭の著作が広まるにつれて弄石家たちの間でも、どこまでを純然とした神代石と呼ぶのか、解釈の差によってその指す範囲にゆれが出ているものと考えられる⁽²⁰⁾。
- ・術語としての定義が曖昧なまま、明治以降、日本で近代考古学が成立すると完全に消滅した。

3-1 「神代石」の名称の成立に関する見方

「神代石」の語を石亭が作ったと見るのは、石亭の『神代石之図』で浄書した鈴木一保（浣華井甘井）が記した跋文の中に「神のみわざに正しく、今の代に残て世に顕はるるは、太平の御代のめでたきを愛で給ひたる神の御こころなるべしと、神代石とやすらかに名付しは、翁の心の能く皇朝のいにしへをしれりといふべし（下線は、引用者）」とあることを示し、文中の翁は石亭を指すので、石亭が神代石と名付けたと考えるものである⁽²¹⁾。それに対して長谷川言人は、「此名称がいつ誰によって作られたかは明かではない。（中略）神代の文字を石器の名称に充用することは恐らく石亭以前にも試みられ、神代筒石、神代手斧石、古代の神作等記せる例は鈔くなかっただらうが、神代乃至古代日本人の製作にかゝれる石器を神代と総称することは豊富な経験を有した石亭にあらざれば能はざりしことと推定される。」として、その見識によって石亭が定

義づけて使用した語との見解を示している⁽²²⁾。

3-2 石亭が神代石とした石器類

『雲根志』に多数収載されている石器類で、それらに付けられた個別の名称にはいくつか特徴がある。

『雲根志』後編、三編に見られるものには、

石鞞、天狗飯匕、雷杖、雷環、薑擦石、糸巻石、劔石、神鑪、(後編卷之四)

曲玉、車輪石、石劔頭、石刀、狐鉋、狐鑿、異志都々伊、青龍刀石(三編)

がある。これらは、単に「神代石」と記されたものとは区別して用いているものだが、この個々に付けられた名称は、必ずしも本来使われた用途が明白ではなくても、それぞれの外面的な形状から名称が付けられたものであることがわかる。「雷一」は『本草綱目』の霹靂礮、雷墨があることから、同類に想定して命名されたようである。また「石一」、「一石」は同時代に存在した、類似するものの形状品に見立てて、それが石で作られたような形状の意である。そして「狐一」「天狗一」は、「鬼一」などと同じように、あたかも人間以外が使うような異質な物との見立てによる。何れも未知の形状を、同類の既知に結びつけた命名である。その上で、概ね形状からでは用途の見当が付かないものが神代石の名称のままにされたように見える。因みに『雲根志』で具体的な名称を付けずに「神代石」としている石器は、その記述や挿絵から見ると鋤形石、独鈷石、石棒などに相当する。一方で『雲根志』では石鞞、天狗飯匕、車輪石、石劔頭といった具体的な名称を載せているにも拘わらず、『神代石之図』ではそれらも神代石としたまま挙げて描かれている点、石亭自身にもこの語の使い方にゆれが見られるようである。

また、「神代石」の名称は使用目的や製法が人間を越えた存在であることから、そこに神意の霊力の内にも想起させた。石亭らが弄石、神代石という概念を持つ以前、或いはその考え方を知らなかった場合でも、地中から出現したそれらの不可思議な形状は比較的 naturally 民俗的な信仰に結び付くものであった。神代石と各地の民俗的な信仰の事例については後述する。

3-3 本草学と弄石での石亭の位置づけ

本草家は天産物を観察し記載することで、博物的な産地や形状などの知識を蓄積し、それが特に実学的な物産学の部分では殖産興業に資する見方をしてきた。当初石亭が本草家から学んだのは、このような天産物に対する見方であったはずである。近世本草学がフィールドワークを重視しさかんに山野を調査していたことも、弄石とは親和性を持つものである。そこに石亭自身が強く関心を持つ、地中から現れる岩石・鉱物・化石、化石・考古遺物に対象を特化させ、それを草学的視点と手法を以て記載していったとことに、近世本草学上の、石類の理解が拡大する元があった。

特に『本草綱目』にはなかった石器などの出土遺物について、天産物であることを所与の事実と見なさず類例を蓄積して考察を加えていったことが特筆される。

一方、石亭は趣味として石を愛し、コレクションを充実させて弄ぶ愉しみを失わず、弄石社を結成して築いた情報ネットワークを通して活動していたが、これは石類を学芸活動の視点から見ることの確立であった。つまり、石亭は石を学芸活動として見る眼と、物産学から学んだ眼との複眼を持つことで、弄石家と本草家の間に位置していたと見る。そうであったからこそ、本草学的手法による石の博物誌を集大成した『雲根志』を著し得たのであろう。石器類に対しては形状から奇石と見て満足するだけでなく『曲玉問答』『天狗爪石奇談』『鋤石伝記』などの著作でも化石や出土遺物を独自に類別して考察を加え記載していったことも日本独自の、近世本草学展開を特徴付けるものだったと見るができるだろう。

近世に花開いた様々な学芸的諸活動には、実学ではない趣味の要素もまた必要であった。その点で石亭の活動には単に石集めの趣味が昂じた物好きと断ずることはできないものがある。

4. 弄石、弄石家と越中・立山とのつながり

石亭を中心とした全国的な弄石家たちの情報ネットワークから、次の2つの点で越中・立山を位置付けてみたい。

①越中国内・立山山域産のどんな石類が弄石家の元に渡っていたのか。(石類採集のフィールドとしての越中・立山の存在)

②越中に在住した弄石家が持っていた情報はどのように他へ伝えられ、また他からもたらされてきたのか。(情報の流入と伝播に関連した人物の存在)

弄石家たちのコレクション収集方法には前述のように自分で採集する他、同好者との交換や贈与、奇石商からの購入などの手段があった。採集の旅に出ることもあったし、それぞれに居住地を中心とした情報を手にして奇石の産地に住む同好者を相互に訪問したり、書簡で情報のやり取りを行ったりしたが、珍しい未知の石類を求めようとすれば広い交際を求めるのは自然なことであらう。

越中を中心にしてその近隣の地域を見渡せば、神代石に関しては信州や飛騨、天狗爪石は能登などで多く採集されたようである。石亭と、高山に住み石器類を多く所蔵した二木長嘯や津野滄洲などとの交流では、石亭から長嘯へ所蔵する神代石を無心する内容の書簡が多数の残されている⁽²³⁾。また、『雲根志』の中には、地方に住む文人たちからの情報も載せられ、近隣では金沢の俳人堀麦水や医家の津田随分齋などの弄石家から収集品や産地の情報もたらされていた。越中国内の情報についても、そこから金沢を経由して石亭の元に伝えられたものが含まれる。

越中産の石類では、材木坂の材木石が「材木化石」の名称で「(前略)また加州麦水のいふ 越中立山へ芦倉よりのぼる麓、最初の坂口土中残らず数千の材木にしてことごとく石と化せり」とある他、木葉石が「万物化石」の名称で「(前略)また加州金沢麦水のいふ 越中城端の真向かいなる赤渋山という所に万物石に化する地あり」と記述されている例などが散見される。

石亭の著作『雲根志』と『奇石産誌』、及びこれまで管見した大坂、京都で開かれた物産会等の目録などで、そこに記された越中・立山産の岩石や化石については、立山山域の他は西部地域の氷見、福光、城端などの比較的限られた地域のもが多かった。立山山域では禅定登山などで来訪者数が多いことで、情報が各地へ伝えられる下地があったことや、越中西部、特に高岡を中心とした医者層は京都の本草塾へ入門することが多く、京都本草学との情報の結び付きが比較的強かったなどの理由があったものと思われる⁽²⁴⁾。

これらの情報は、必ずしも石亭の元に集まってから再度発信していったものばかりではない。また弄石家同士はお互いが連携し、絵図の模写による情報の伝播は各地で繰り返されていったので、必ずしも所蔵者同士と直接つながりがあったとは限らない。絵図が複数の場所で模写されながら情報が拡散していった。当然ながらそこでは、実物を見てそれを直接模写しているものに比べて、模写を更に模写した形で伝えられる際の図の歪みや誤字などの不正確さは含んでおく必要がある。

4-1 越中在住の弄石家

今回の調査で、越中に在住し石亭とつながりがあった具体的な人物を複数確認することができた。今後更に史料が発掘されれば詳細なつながりが見えてくるであろうが、今後の研究の足がかりとして現時点での調査結果を報告する。

4-1-1 笹倉自清

越中在住の弄石家で非常に広い交際があったことが分かり、旅をしながら各地の奇石類の模写、採集を行うとともに、所蔵する石器類、奇石類や絵図を持参して全国各地の弄石家を訪ねていたようである。

生年は不明だが、天明の頃から婦負郡笹倉村の本家浅野家に身を寄せており、文化元年(1804)に越中

で没している⁽²⁵⁾。本家浅野家は富山藩の十村役を務めた豪農で、同家に残る文書の中には自清の弄石趣味に関するものを含むものが多数残されており、婦中町史編纂室が調査し『浅野家文書目録』が作られている⁽²⁶⁾。その中では、安永年間から寛政年にかけて自清が模写した石器類、奇石類の絵図や拓本等の文書を中心に55点をまとめた「自清道人書画集」⁽²⁷⁾が注目される。

自清が旅の中で見聞き書き残した絵図や文書の中には、湖東石亭（木内石亭）、飛州高山長嘯（二木長嘯）、飛州福島屋滄洲（津野滄洲）、富山藩士吉川敬明、高田鈴木甘井（鈴木一保）など、石亭本人及び石亭と非常に近い関係を持った各地の弄石家の名前が見え⁽²⁸⁾、石亭を中心とした弄石の中心人物と自清とのつながりが見えて興味深いものがある。

『玄経集』を作った智寛が来訪者を記した芳名録『短冊窟』⁽²⁹⁾には「寛政七年（1795）卯四月 越中婦負郡笹倉村／妙順寺辺 清原自清」とあり、この年には自清が智寛の許を訪ねていたことがわかる。また『玄経集』の記述で、各地の弄石家の名前を載せた「諸国好土」の項には、それ以前の来訪記録「寛政三年亥五年來ル 越中婦負郡笹倉村妙順寺辺／笹倉清兵衛自清／伯父ハ高千石百姓」がある。『浅野家文書目録』には、寛政3年9月に「妙順寺」から「所々役人中」に宛てた笹倉村 清兵衛の往来手形⁽³⁰⁾の存在が載るが、これはその時に智寛を訪ねた際のものであろう。その際には所蔵する石器類や模写などを携えて行っており、智寛はそれを元に模写したようで、『玄経集』では「自清からの情報を元にしたこと」が書き添えられている部分が複数ある。例えば、「一 對島國住吉神社御神宝曲玉図／寛政七卯五月／自清ヨリ傳」とある図は、後に『珍石図』にも模写されているものだが、『浅野家文書目録』で「對島國住吉神社御神宝曲玉図写」とあるもの⁽³¹⁾がその元図であったと見られる。その他にも、「一 信州高井郡大滝村 自清ヨリ写」と書かれた石棒、石鏃、石斧など計36種の図があり、これも自清が手許に持っていた石器模写図からの模写である可能性が高い。

自清が所蔵した珍石奇石・石器類は膨大な物であったと見られるが、『玄経集』には「自清持物」と添え書きして、次の石類を収載している。 ※（ ）は産地の情報

玉フ、ヒヤウタン石（加州金沢犀川）、サメ石（阿州那珂郡）、筒玉随（越中砺波郡）、苔入水晶（備中嵯峨野）、松板ノ化石黒（伊賀上野）、ツギ釘黄（伊賀上野）、貝石 白鼠（土佐）、貝石 白（加州大聖寺）、貝石黒（越前穴馬）、玉ノ浦玉石（紀州）、貝石（駿州月吉）、蟹石（蝦夷）、石磬（濃州金星山）、菊石（紀州）、網石、肉石、赤寿石香合軸（濃州）、弾丸（尾州一ノ宮）、紫石英（加州大聖寺）、木葉石（能登）、木葉石（常陸）、人形石（江州石山）、馬ノ蹄石星クソノ類（隱岐）、角貝化石（越中婦負郡城野）、松実化石（濃州月吉）、馬蹄石（駿州安倍川）、蛭石（能州宝達山）、亀紋石 カブト貝石（出所不知）、貝類品々

これに続けて「右自清聞出写并同人所持之物写宝」とした2品（露之硯、リウギウ石）も並べている。

自清は少なくとも寛政3、7年の2回智寛の許を訪ねており、かなり親密な交流があったと思われる。そして時期的にはその間となる寛政5年には石亭を訪ねているが、それ以外にも自清は度々石亭を訪ねる深い関係があった⁽³²⁾ことが分かる。ここからは、智寛と石亭の情報交流で自清が介在する立場にあったことも伺わせる。

4-1-2 吉川唯右衛門敬明、池田嘉助

吉川唯右衛門敬明⁽³³⁾、池田嘉助⁽³⁴⁾といった富山藩士たちが神代石を収集していたことは、今回の調査で初めて目にしたことである。富山藩内では、上層部の間で古銭や神代石の収集、高山植物の採集収集を行っていた趣味人が少なくなく、その影響を受けて家臣の中にもそのような趣味が広がっていたことが想像される。前述の、富山藩薬品会で石器類の出品が多かったという事情との関連も考えられる事実であろう。

石亭の『神代石之図』には池田嘉助所蔵の神代石（写真1）が収載され、「越中富山侯臣／池田嘉助蔵／質硬」と添え書きされている。これは石冠を描いたもののようだが、同書に収載された石器にはどれも個別の名称は書かれていない。表題に『神代石之図』とあるように、収載されたすべては神代石であることが前

提で、敢えて個々の名称が省かれているようにも見える。

取載順を見ると、それに続いて吉川唯右衛門所蔵の石棒図(写真2)があり、添え書きには「同国(註:越中)婦負郡野積谷市谷山中華表下掘出」とある。これと同じ石棒の拓本が浅野家文書の中に存在しており⁽³⁵⁾、それは自清が吉川から現物を借りて拓本を取ったか、或いは吉川が拓本を取って自清に贈ったものと考えられる。何れにしても、吉川と自清とは弄石を介した交流のあったことがわかる事例である。その拓本に「神代石/越中婦負郡野積谷/布谷村山中華表下ト云/所ヨリ掘出ス/長サ二尺一寸/廻り中ニテ五寸/越富山/吉川敬明」とあるのが『神代石之図』記載の元である。『神代石之図』に見られる地名細部の誤記は、模写の際に起こったものであろう。

池田の石冠の元図は管見できなかったが、これらの事例から類推すれば吉川と池田は直接石亭と情報のやりとりをしていたのではなく、情報は自清から石亭へ伝えられていた可能性の高いものである。

4-2 市岡智寛『玄経集』と『珍石図』

信州飯田に住む智寛は、寛政11年(1799)に在地のキノコ類を観察した『信陽菌部』を著したことで知られているが、それとともに貝類・鉱物・化石・考古などの実物標本を収集した他、様々な芸道、学芸活動に手を染めていた在地の教養人でもあった。

大変に好奇心旺盛な人物だったらしく、『玄経集』には興味を持った奇石や化石、石器類、貝類など本草学関連の天産物を中心に、全国各地の弄石家や本草家などの同好者の所在、氏名、主な所蔵品、そして貝合わせの和歌、古銭の名称などの引用も含めて雑多な知識とスケッチが記されている。智寛は目にした書籍や絵図帳の記載を精力的に模写しており、知的好奇心の高さには驚かされる。同好者たちを実際に訪ねたり、また訪問を受けたり、書簡を交わして絵図を交換しながら情報を得たものと思われる。内容的には全体を通して草木や鳥獣の図は見られないので、その関心は本草学全般に亘るものではなく、基本的に弄石家と見てよいだろう。

『玄経集』は手控え帳であるから序文や跋文はなく、作られた時期は未詳である。但しそこからの模写を中心に作られた『珍石図』には、その跋文に寛政11年(1799)とあることから『玄経集』自体は、少なくともそれ以前には作られたものと見ることができる。また、「諸国好士」とある項の中で石亭について「山田村木内小繁石亭/雲根志十二巻著」とある点が注目される。『雲根志』には製本の冊数が異なる異本が多く、その中では前編六冊、後編六冊、三編六冊の物が最も古い版になる⁽³⁶⁾。ここに十二巻とあることから、安永8年(1779)に後編までの12冊が刊行されて以降、三編が刊行される享和元年(1801)以前に書かれた記述であったことがわかる。これらの点から総合すれば、同書は1779年以降20年間に書かれたものと推定される。

また『珍石図』は、智寛が各地の弄石家が所蔵した神代石や奇石、貝などを描いた絵図の転写を中心とした卷子である。木内石亭はじめ、石亭と関係が深く神代石を収集した飛騨の二木長嘯や越中の自清らの所蔵品を描いた絵図の模写が含まれる。序文と奥書には寛政巳未の年号があり、寛政11年の作と見られると共に序文には、制作の理由は同好者とおぼしき「友松子」なる者の求めに応じて制作したものとある。但し、そこに描かれた絵図がどのような意図で選ばれたものか、記載はない⁽³⁷⁾。

『玄経集』からの模写の他には、『雲根志』から「二十一品種珍藏」(前編巻之五)、「石鞞」(後編巻之四)の模写も含まれるもので、この時代に多数作られた石器類の模写絵図集と同様に、同好者との情報交換のため個人的に集めた情報から絵図を模写して作成したものと考えられる。このような模写の作成が当時の弄石家たちの情報伝播では重要であった。

模写した石類に所蔵者として名前が挙がるのは全国各地に在住する弄石家など31名と多数だが、勿論そのすべてと直接の交流があった訳ではない。

4-3 芦峯寺、岩峯寺の宿坊が所蔵した「誕生石」の記述

立山信仰を布教する衆徒が宿坊を構えた集落は、立山山麓に「芦峯寺」と「岩峯寺」の二つ存在した。それぞれ近世には加賀藩から庇護を受けるとともに、芦峯寺集落は全国各地での布教や配札を行う利権を持ち、岩峯寺集落は加賀藩領内での配札や出開帳を行う利権の他、山役銭の徴収や山中にある堂舎の修理などを行っていた。今回確認した「誕生石」2点は、それぞれの集落に存在し宿坊家とも関係が深いものであることから、何らかの宗教行為と関連があったものと見られる。そこには前述の宗教権益の違いも関係していたように思われるが、ここでは神代石に関連する情報の記載と交流、そして「誕生石」の名称と民俗的な信仰と関連する事例の紹介を中心に論を進める。

ここに挙げた2つの「誕生石」を載せているのは『玄経集』、『珍石図』、『神代石之図』で、『玄経集』、『珍石図』は智寛が模写したもの、『神代石之図』は石亭が作成し、交友のある弄石家鈴木一保が浄書したものである。この内『神代石之図』は写本による異本が多数存在し⁽³⁸⁾、その内容にも差異が確認されるが、以下特に但し書きしないものは、関西大学図書館所蔵『『神代石之図』上巻』収載の絵図⁽³⁹⁾を資料としている。

以下、それぞれの資料に収載する記述を提示し、芦峯寺、岩峯寺それぞれにあった誕生石についての記述を比較する。

4-3-1 市岡文書『玄経集』収載の図

(写真3)は芦峯寺の宿坊が持っていたと見られる「誕生石」である。添え書きには「越中芦峯坊預り宝物ノ内ニアリ誕生石ト云伝フ／江州長浜横超院珍藏石ノ内ニ此同物アリ／雷槌ト称スルヨシ美濃守様ニハ雷槌ト称ス」とある。

近世以降、芦峯寺には33の宿坊が存在していたが、添え書きの「預り」は特定の坊の所有ではなかったことも窺わせる。芦峯寺に現存する文書にもこれに関連する記載がなく、具体的な履歴などは不明である。

神代石を誕生石と呼んで安産の呪符に用いる事例は、後述のように他地域にも見られたことであり、ここでは、立山の宗教活動の中にそれが取り込まれていた可能性を示すものであることを指摘するにとどめる。

また、「江州長浜横超院」は、長浜市元浜町の真宗大谷派長浜別院大通寺5代住職横超院(享保6年<1721>～寛政3年<1791>)を指す。書画や俳諧の才能にも長けた文人で、弄石家としても知られていた。また、「美濃守」は大聖寺藩7代藩主前田美濃守利物(宝暦10<1760>～天明8<1788>)を指すようである。夭逝しているが、弄石家としても知られており、各地との情報交換があったことが窺われる⁽⁴⁰⁾。

「横超院珍藏石ノ内ニ此同物アリ」とあるように、これと同型の石が石亭の「諸家所蔵神代石図」(『雲根志』三編卷之五付録)にも描かれており(写真4)、そこには「出所詳ならず 形図の如く石質漆のごとく玉の如し 横超院御珍藏也」とある。形は確かに芦峯寺のものと酷似しているが、「誕生石」の名称はない。ここでは用途不明の神代石と見なされていたようである。

(写真5)は「誕生石／惣長上ニテ六寸七分五厘下五寸九分余／此所廻り三寸九寸／惣体ヒラメナリ／少カケアリ／越中立山ノ内／岩崎ノ坊ニアリ」とあるものだが、寸法が詳細に記されている点が特徴である。「岩崎ノ坊」とあるのは「岩峯」の誤記と見られる。岩峯寺には24の宿坊があったが、これも(写真3)の芦峯坊のものと同様に、所有した坊家は特定できない。ただ、岩峯寺の宿坊家は立山山中にある堂社を管理する立場にあり、山上の宝物を里に下ろして保管することも可能であったことから、小論では(写真6)の「同立山別山／帝釋天什寶」と同品であったと推定した点については後述する。

この何れの誕生石の記述も、それが誰からの情報に基づくものであったかは未詳である。但し、それを推定する手がかりとして、浅野家文書にある自清が描いた神代石絵図の中に見える添え書きに、扁平の意味で「ヒラメナリ」という表現が複数使われている⁽⁴¹⁾点が指摘できる。これを自清が好んだ表現だとすれば、『玄経集』の記述は智寛が自清の手許に持っていた絵図から、まず見たままを写したものであり、『珍石図』でのそれは内容を簡略にして表したものだだったと考えられるので、情報は自清から直接伝えられたものである

可能性が非常に高いものと考えられる。

4-3-2 『珍石図』 収載の図

(写真7)には「越中 蘆辨坊預／誕生石ト称ス／此物江州長浜横長院珍藏ノ内ニ有雷槌／ト称ス松平美濃守殿ニモアリ雷槌ト称ス」とある。これが(写真3)を模写したものであるのは間違いない。『玄経集』では横向きであった図は、ここでは縦に、やや大きく描いている。地名が「蘆辨坊」とあるのは、「嶽」が立山地域の地名以外には使われない特殊な字だったため「弁」と見誤り、更に「芦」とともに正字にした二重の誤記になる。その他には大きな違いは見られない。

(写真8)には「越中立山 岩崎坊／誕生石／長六寸量許／此所三寸九分 惣躰扁ナリ／少欠アリ」とある。(写真5)を模写したもののだが、これも図を縦にし、寸法は簡潔に略されている。しかし欠損があるというこの資料の重要な特徴は「少欠アリ」と、正確に写されている。

4-3-3 石亭『神代石之図』 収載の図

『神代石之図』では「誕生石」の名称は用いられていない。情報を入手した時に既に「誕生石」の名称がなかったのか、或いは石亭がこれを神代石と認識していたので、敢えてその名称を外した可能性もあろう。

(写真9)には「越中新川郡／立山什寶／芦嶽中預／石色不詳」とある。石色不詳とあるが、石亭が目にした絵図は既に墨絵(モノクロ)だったようである。

(写真6)には「同(註：越中新川郡)立山別山／帝釈天什寶」とある。ここでは誕生石の名称も岩嶽寺の宿坊との関係も書かれていないが、形状から(写真5)、(写真8)と同じものであったものと推定される。

(写真8)とは描いた方向は変わっているが、形状は『玄経集』に見られたものと同じ、今日で言う「独鈷石」の類で、先端部にある特徴的な欠損がきちんと描かれていることと、「別山」とある点が注目される。別山は立山信仰の中では帝釈岳とも呼ばれ、山上に帝釈天像⁽⁴²⁾を祀る祠があったこととの関連が考えられるからである。

岩嶽寺宿坊の衆徒たちは山中の堂社の修理などに際し、その費用を集めるために帝釈天像を里へ下ろし出開帳していた⁽⁴³⁾記録がある。これは山中の堂社に祀られた什物を岩嶽寺の坊家が管理していたから出来たことであろうが、まず、ここで立山山中にあった堂社の什物と岩嶽寺宿坊とのつながりが見える。

帝釈天とこの「誕生石」の形状との関連では、立山の帝釈天像は独鈷杵を持つ像容には造られていないが、インド神話にまで遡れば、帝釈天(インドラ)は煩惱を払う武器として独鈷杵(ヴァジュラ)を持つとされていたことと関係があったのではないかと推測する。

近世ではまだ一般にこの形状の石器が独鈷石とは呼ばれていなかったようだが、形状として独鈷杵に似た石を代替して、帝釈天と関連づけて仏教に基づいた宗教的意味づけを持たせ、別山で一緒に祀られていた可能性があったと仮定すれば、この図の石器が「別山の帝釈天什宝」と伝えられていたことに符合すると思われる。更に、これが出開帳を通して里で公開されていたならば、この帝釈天と信仰的に結びつけられた石器の存在が弄石家に知られていた可能性もまた高かったと思われる。

但し、実際に別山頂上の祠に帝釈天像の他に宝物が安置されていたかどうかは不明で、現時点では物証のない仮説である。

別山—岩嶽寺—帝釈天立像—帝釈天什宝(独鈷石)をつなげて考えることができれば、立山信仰の実態を見る上で新たな視点となると思われるので、今後の史料的な裏付けに期待したい。

5. 「誕生石」にまつわる信仰

近世、「誕生石」と呼ばれた石には二つの種類がある。一つは、その石のそばで歴史上の人物が出産した類の伝説を持つ石⁽⁴⁴⁾である。もう一つは、安産祈願、子授けなど出産に関する信仰の対象に用いられた様々な形状、謂われを持つ石である。小論では後者の事例を挙げる。安産や子授けは、家の存続が重視された社会形態の中では極めて身近で切実な現世利益であったと考えられるので、何らかの物を呪符として身に付けたり、飾ってその形にあやかたり縋ったりする信仰もまた各地で見られた⁽⁴⁵⁾。そのまじないやお守りの種類は各地で非常に多く見られるもので、子安神を古くから各地で子安荒神、子安弘法、子安稲荷など他の信仰と結びつけて信仰しているものが見られる。

そのような事例が示すように、安産信仰は各地にあった土着の信仰とも結びつくものであり、伝説を伴った石が「誕生石」或いはそれに類する名称で呼ばれる信仰が各地に見られたようである。特に形状に注目して、男根や女陰の崇拝は生殖力・豊饒力に対する信仰として古くから存在しており、男根形の石を祀って子授けや安産を願う事例は非常に多いようである。

各地での「誕生石」の類例として管見できたのは、次のようなものであった。

(1) 「石棒（大まる様）」片吹大日堂（静岡県周智郡森町亀久保）

大日堂は寛政9年（1797）に建立され、側面には中が覗き込めるように2つの小窓が付けられている。堂内には、男根形をした長さ約94cm、直径約12cmの石棒が安置されており、「大まる様」と通称され子授け、安産祈願で信仰されている⁽⁴⁶⁾。

(2) 「子産石」（神奈川県横須賀市）

「石が石を生む」という伝承⁽⁴⁷⁾から、生殖・安産の神が宿る石として地元で信仰されている。子供に恵まれない女性がこの子産石を撫でた手で腹をさすると懐妊する、妊婦が石で腹を撫でると安産になるなどの伝承が残る。

(3) 「誕生石」（岐阜県飛騨市神岡町柏原）

この石を納めた箱の箱書き（明治22年〈1889〉）によれば、これには「今ヲ距ル百有余年該祖松坂市兵衛、祖先某ガ同地山中字向山ノ内ソトワニ於テ発見セシモノ」との謂われがある。

この石器の形状は、中央部からやや一方に偏りくびれがあり、一端が突起状に作られ全体に細く長い特徴が目立っている。両面共に凹線による区画文が見られ、全面が研磨された石器である。近代以降に考古学では御物石器と区分されるが、発見された近世にあつては、磨製石斧や独鈷石とも大きさや質感に共通性があるように思われ、これら一連の磨製石器の類は地元の信仰に結びつけ、信仰の対象にしていったのではないかと思われる。この地域ではこの石器を「誕生石」と呼び、地元の尼寺に納められ妊婦がこの石を抱いて安産を祈ったという⁽⁴⁸⁾。

この御物石器自体は、縄文時代後期から晩期に見られる非実用品であり、飛騨・美濃地方及び北陸地方を中心とする中部山岳地帯にあり、特に益田川・飛騨川沿い及び木曾川・長良川・庄川並び神通川流域に多く分布する⁽⁴⁹⁾ものである。

(4) 「誕生石」（長野県下伊那郡阿智村）

幕末に信濃国各地を実査して書かれた地誌『信濃奇勝録』巻之四には、市岡家が所蔵していたとする誕生石2点の絵図（写真10）がある。この市岡家は前述の市岡智寛の家系で、この石器は智寛のコレクションだったと見て間違いのないものである。

1点は「誕生石 此二石園原（註：園原は現長野県下伊那郡阿智村）ヨリ出ル／長六寸六分／灰白色／少シ平メナリ」、もう1点には「面七寸九分／横」とある。前者は独鈷石、後者は扁平な神代石を指しているようである。

添え書きには「民家に持ったへて婦人産に臨む時是を手に握りしよし 因て誕生石と名つくと云」と説明されている。この史料によれば、この地方では「誕生石」信仰がこのように定義付けていた点に注目する。石を神体として崇めるのではなく、手に握りしめて安産を祈る呪符としての定式があったことが特徴であろう。神代石のこのような呪符としての類例は管見しないが、握りやすい形状であること、神代石という謎めいた定義の石であること、形状が独鈷石によく似ているものであることなど、立山の宿坊にあった「誕生石」と非常に類似性を感じられる。近世から信州・美濃など呪術石器が多く出土地域では、このような民俗的な信仰と結び付いていたのではないかと、また地域的にも、神代石を中心に収集していた弄石家が多い越後、越中との関係があったのではないかとと思われる。

(5) 「誕生石」 大岩山日石寺（富山県中新川郡上市町大岩）

加賀藩三代藩主利常が大岩不動に正室天徳院（珠姫）の確実な世継の誕生、加賀藩の安寧を願い奉納したと伝わる石棒である。『神代石之図』にもこの石の絵図（写真11）がある。また、金子盤蝸が『立山遊記』（天保15年〈1844〉）の中に「日石寺 慶長中、小松中納言様御簾中様誕生石有り」と紹介している記述がある。当時から参詣者に公開されて、その謂われが広く知られて信仰されていた物のようである⁽⁵⁰⁾。身分的に高い立場で子授けと安産を願う意味で奉納した点も興味深い。また古い記録であり、誕生石の名称とその信仰は少なくとも近世初期にまで遡ることができる事例である。

5-1 宿坊家の宗教活動との関わり

立山での布教活動の中で、石器を「誕生石」と呼び呪符としていた安産祈願信仰と関連があった可能性を示す資料がある。当館が寄贈を受けた岩嶽寺の宿坊関係資料の中に、立山信仰の伝承を持つ什物と混ざって磨製石斧と一緒に所蔵されていた事例⁽⁵¹⁾である。

独鈷石や御物石器、男根形の石棒などは考古学では細かく分類されているが、石斧を含めた磨製石器は、もちろん細部の形状には違いがあるが、呪符として手に握ることを想定すれば、大きさや質感などはほとんど同じ括りで見られたのではないかとと思われる。むしろそこには、人知を越えた「神代石」としての意味合いを持っていたことの方が重要であったと見る。「神代石」を、信仰の上で「誕生石」と呼ぶことは、そのような要素を踏まえたものであったと見る。

また、帝釈天の信仰と安産のつながりを示す形の事例には、岐阜県加茂郡白川町坂ノ下東広島の大通寺・安産神社をめぐる帝釈天が安産の仏とされてきた謂れを伝える地元の伝説もある⁽⁵²⁾。前述のように、「独鈷杵」（ヴァジュラ）の形状をした石器と帝釈天（インドラ）とはインド神話を起源とする宗教的な関係が作りやすいものであったと見られる。『雲根志』には「誕生石」の項目がないことから見ても「誕生石」の名称は石斧や車輪石のように石の形状を指して名付けられたものではなく、安産等の民俗的信仰の存在によって機能に対する名称であったと考えられる。そして、この名称が立山でも使われていたとするならば、立山での宗教活動の中に誕生石の信仰につながる神代石を呪符として用いた形態があったことを示唆している。

立山信仰の中で「誕生石」が安産祈願に用いられていたとする明確な史料はない。ただ、配札に使われた様々な種類の護符には、当館が所蔵する護符版木を見ると火の用心、養蚕御守、家内安全、大漁祈願、盗賊除、そして子孫繁栄、長寿などの日常生活の中で生じる現実的な現世利益を求めたものが多数見られる。

これらの護符は宿坊ごとに木版によって大量に摺られ、各地の布教先で配札された。版木の製作年代は未詳だが、そのような様々な種類の護符が作られていった背景には、信仰する側の場所や立場、時代などのニーズと合致するものを取り入れようとする、民間信仰との交点があったようである。布教する宿坊家がニーズ

を敏感に取り込み、宗教活動を拡大するために利用された部分があった、とされる⁽⁵³⁾からである。そしてそこには、各地の配札先で他地域の宗教者らとの情報交換があったことも考えられる。現時点では、立山での宗教活動の中で「誕生石」信仰を示す確証はないが、様々な現世利益を願う護符が作られていったことから、神代石を「誕生石」として安産や子孫繁栄を祈る民俗的信仰の形が、各地での布教を繰り返す中で他地域からの情報として立山での宗教活動に取り込まれていったと推測する。

ここではこのような推測の上に立って、立山信仰では帝釈天の存在、帝釈天が手に持つ独鈷杵と形状の類似した神代石と安産祈願信仰が結び付き芦峯寺、岩峯寺衆徒の布教活動の庶民性や現世利益のニーズを背景に誕生石の安産祈願信仰が存在していた可能性を指摘しておきたい。

まとめ

小論では近世の弄石、神代石と立山の結びつきについて、大きく2つの点から考察した。

1つは近世本草学での弄石の実態、神代石の認識について石亭が果たした役割を整理し、石亭を中心とした弄石家たちのネットワークに見える越中・立山の石類の情報と伝播を、特に「誕生石」を中心に具体的な事実を示した点。そこから、近世本草学では実学的な物産学と学芸活動が、接点を持ちながらも乖離した方向へ展開していくことで、内容的な裾野を広げ独自の展開を見せていった実態が見えた点である。

もう1つは、『玄経集』、『珍石図』に残された「誕生石」の絵図にあるように芦峯寺や岩峯寺の坊家では神代石を所蔵しており、それを「誕生石」として安産祈願に採り入れていった可能性を指摘した点。すべての宿坊家で同様の布教活動をしていたか否か、布教先での行動や情報交換の具体的な内容については、筆者は十分な知識を持っていないが、立山での宗教活動に近世本草学の展開、特に弄石との関わりという、これまでになかった視点からの考察が可能であることを示した点である。

立山信仰で布教のために持っていた全国的なネットワークと、弄石家が情報交換を行ったネットワークとは、同時代にはそのどこかで人的な交点があったとしても不思議ではない。

その点で今回の紹介は、立山信仰の布教の実態を宿坊家での教養の形成、近世の地域間ネットワーク構造から検証することにもつながる事例であろうと思われるが、石亭をめぐる弄石に関する情報や人のつながりもまた、立山の宿坊衆徒と布教先とつながりについても新たな事例の蓄積が必要な部分かと思われる。

【謝 辞】

小論の執筆に際し飯田市美術博物館、飯田市立中央図書館、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、国立国会図書館、富山県立図書館、富山市公文書館、名古屋市鶴舞中央図書館、原孝昭氏より資料情報提供、画像掲載と掲載承諾にご協力をいただきました。お名前を挙げて感謝申し上げます。※（五十音順）

【註】

- (1) 富山県 [立山博物館] 令和元年度後期特別企画展「かがやく天産物—時代を越える立山ブランドを求めて—」展示解説図録参照。採葉使については、拙稿「享保7年立山・黒部奥山での幕府採葉使による葉草見分について」（富山県 [立山博物館] 『研究紀要 第6号』、1999）、「立山を訪れた幕府採葉使—享保7年、16年の葉草見分に関する『為覚通聞記』の記述から—」（富山県 [立山博物館] 『研究紀要 第7号』、2000）、「越中での幕命採葉使受入の実態について—「享保七年 新川郡葉草御用一卷覚留帳」を中心に—」（富山県 [立山博物館] 『研究紀要 第18号』、2011）、「採葉使植村政勝の越中、立山来訪について—松儀家文書「享保十六 葉草一卷」の記述を加えて—」（富山県 [立山博物館] 『研究紀要 第19号』、2012）参照。諸国産物調査については、安田健『江戸諸国産物帳 丹羽正伯の人と仕事』（晶文社、1987）等を参照。
- (2) 「市岡文書」（資料番号1117）飯田市立中央図書館蔵。
- (3) 原孝昭氏蔵。卷子本一卷で、卷子表紙には「珍石図」とある。飯田市美術博物館平成16年度企画展「江戸の好奇心—信州飯田・市岡家の本草学と多彩な教養—」の展示解説図録に全図が写真掲載されている。小論では同図録掲載の写真

を資料に用いた。

- (4) 磯野直秀「日本博物誌雑話(5)」(『タクサ No.7』、日本動物分類学会、1999) 参照。
- (5) 森由雄『神農本草経解説』(源草社、2011) 参照。嘉永7年(1854) 森立之が復元したものに基づく。
上薬 18種(玉泉、丹沙、水銀、空青、曾青、白青、扁青、石膽、雲母、朴消、消石、熨石、滑石、紫石英、白石英、五色石脂、大一禹余粮、禹余粮)
中薬 14種(雄黄、雌黄、石鐘乳、殷孽、孔公孽、石硫黄、凝水石、石膏、陽起石、慈石、理石、長石、膚青、鉄落)
下薬 9種(青琅玕、礬石、代赭、鹵鹹、白悪、鉛丹、粉錫、石灰、冬灰)
- (6) 石膽、木ノ葉石、菊銘石、スクモ(泥炭)、黒土、ミカキ石(磨砂)、人肌石、備後砂、天巧碁子、饅頭石、観音石の11種が採られている。
- (7) 会主は豊田養慶。京都で初めて東山双林寺で開催。
- (8) 江戸の幕府医学館でも天明期以降頻繁に薬品会が開かれた。当該資料は見学者が個人的に筆記した出品の抄録。開催年の記載はないが、同書に記載の出品者名などから文化年間に開催された出品の記録と推定される。
- (9) 尾張医学館で開催したもの。「石罌ヤノ子イシ」は水谷豊文の養子義三郎が1500個を出品していた。
- (10) 『読書室物産会目録四十六巻付録』(武田科学振興財団杏雨書屋蔵 請求番号[杏 5944]) 所収の文化年間以降幕末までの読書室物産会を中心とした出品目録を見ると、少数ではあるが各地で出土した考古遺物の出品例が見られる。その中には越中、立山産の「雷斧」出品の記録もある。またこの時期には、考古遺物に限らず、廃寺や名跡の瓦が「古瓦」として出品する事例が多くなっているのも特徴的である。収集者からすれば、神代石に限らず、天産物以外の出土遺物へ関心が広がっていったことを示す事例のように見える。弄石と読書室との関係については、読書室旧蔵資料を調査した松田清氏の報告によると、同資料の中には享和三年(1803)の弄石社中名簿が存在し、156名の全国各地に住む弄石家の存在、山本亡羊が19歳の時に石亭を訪ねその収集品を見学したことがわかる。松田清『京の学塾 山本読書室の世界』(京都新聞出版センター、2019) 65~68頁参照。
- (11) 齊藤忠『木内石亭』(吉川弘文館、昭和37年) 32~33頁参照。
- (12) 宝暦12年(1762)に源内が主導して江戸湯島で開いた第5回東都薬品会では、全国から多くの出品を募るために、事前に広く引札を配布した。そして出品に当たっては、各地に25カ所の取次所を設け、遠隔地からであっても、そこに品物を持ち込めば、主催者送料負担で出品できるシステムが採られていた。取次所となったのは、物産会の活動を理解した、関係の深い各地の門人や縁者で、源内らの依頼で取次所を引き受けたと思われる。取次所には「近江山田 木内小半」とあり、石亭も源内や藍水らとの師弟関係からか取次所を引き受けていたことがわかる。
- (13) 清野謙次『日本考古学・人類学史』(岩波書店、昭和29) 第八編第一章第二項「標本又は寫生圖の交換、神代石圖譜」参照。
- (14) 大野政雄「二木長嘯の神代石収集」(森浩一編『考古学の先覚者たち』中央公論新社、1985) 参照。
- (15) 1995年栗東歴史民俗博物館企画展「石の長者・木内石亭」展示図録に、購入目録を示した「木内石亭奇石買入覚(断簡)」の写真が掲載されている。斎藤「前掲書」136頁に、奇石商人について価格に関する内容が紹介されている。
- (16) 原文は漢文。引用の訳文は『註頭 國譯本草綱目』(春陽堂、1929) による。
- (17) ここ挙げた出品者のうち、若土武太郎は富山藩9代藩主利幹の孫で、後の前田則邦。父利民は風雅を愛し書画や神代石の収集家でもあった。野中丹室、興津里庵、渡辺文伯、岡田専達とともに富山藩医。利保の本草学サークルとの関連があった者たちだったと考えられる。
- (18) 内田好昭「神代石の収集」(東京文化財研究所編『うごくモノ「美術品」の価値形成とは何か』、2004) 参照。
- (19) 齊藤「前掲書」229~230頁参照。
- (20) 齊藤「前掲書」228~234頁参照。
- (21) 齊藤「前掲書」192~193、230頁参照。
- (22) 長谷部言人「神代石」(『考古学雑誌 第30巻10号』、1940) 701頁参照。
- (23) 中川泉三編『石之長者木内石亭全集』巻六(下郷共済会、昭和11)「飛騨高山二木俊恭と石亭の書簡三十七通」参照。
- (24) 拙稿「幕末期の「物産会」に見る物と人の交流—京都・大阪の「物産会」に展覧された越中・立山での採集品から—」(『富山県[立山博物館]研究紀要 第8号』、2001) 参照。
- (25) 「三九 自清道人の考古資料記録」(『婦中町史 資料編』、婦中町史編纂委員会、平成9) 80~87頁参照。
- (26) 『婦中町歴史文書目録 第二輯』(婦中町史編纂委員会、平成5)。
- (27) 浅野家文書Ⅱ No.99。(浅野興太郎氏蔵)
- (28) 『婦中町史 資料編』80頁参照。

- (29) 飯田市立中央図書館蔵「市岡文書」(資料番号 1182)。ここに書かれたように、自清が署名を清原自清としている理由については不明。
- (30) 浅野家文書Ⅱ No.20 一紙 25cm×32cm。(浅野興太郎氏蔵)
- (31) 浅野家文書Ⅱ No.99-38「對島國住吉神社御神宝曲玉図写」一紙 40cm×27cm。(浅野興太郎氏蔵)
- (32) 石亭の『天狗爪石奇談』に「越中婦負郡笹倉村笹倉清兵衛 / 雅名清丈ト云 / 後改自清 / 常ニ諸国ヲ偏歴シテ奇石ヲ拾ヒ歩行クヲ樂トス風流人ナリ通行毎ニ予カ亭へ訪ル寛政五年十一月廿五日来テ云去ル秋中ハ能州国中ヲ遊行セリ (後略)」とあり、能登で採集した天狗爪石 5 個を石亭に贈っていた。
- (33) 『富山藩士由緒書』によると、享保17年～文化3年。日光での御普請御手伝、江戸で会所奉行などを務め、享和2年に隠居とある。越中だけでなく、日光や江戸での交友関係や弄石の実態にも興味が持たれる。
- (34) 『富山藩士由緒書』によると、御書物所預りなどを勤め文化13年隠居。
- (35) 浅野家文書Ⅱ No.99-32「神代石拓本 野積谷布谷村山中ヨリ掘出ス 吉川敬明蔵」一紙 19cm×46cm (浅野興太郎氏蔵)。『婦中町史 資料編』85頁に写真(第119図)がある。
- (36) 今井功注釈解説『雲根志』(築地書館、1969) 545頁参照。
- (37) 宮澤恒之「市岡家の考古資料」前掲『飯田市美術博物館図録』108～109頁参照。
- (38) 徳田誠志「『神代石之図』と関西大学博物館所蔵資料—弄石家収集資料の流転—」(『関西大学博物館紀要第5号』、1999)「三.『神代石之図の原本と写本』」参照。関西大所蔵の他、神宮文庫、東大総合研究博物館、天理大、内閣文庫の所蔵を挙げ、神宮文庫本を原本と結論付けている。清野「前掲書」「標本又は寫生圖の交換、神代石圖譜」には絵図の模写関係を含めた論考がある。
- (39) 請求番号 N8C2*210.2*1。同図は関西大学アジア・オープン・リサーチセンターが全図をウェブ上で公開しており、小論ではそれを資料に用いた。
- (40) 『諸家奇石図』(西尾市岩瀬文庫蔵 資料番号 辰-19、木村兼葎堂旧蔵本)には前田利物が所蔵する石類を描いたものと見られる30品余りの図が載る。同文庫古典籍書誌データベース(ウェブ公開)の備考欄によると、利物が所蔵した「神足石」図の添え書きに「(前略) 予が城外願成寺是を恵む 此人石を好む事予と同癖にして数品の奇石を所蔵す 上品の玉石類はまで多く江州長浜横超院殿へ献せしもの也」とあり、利物と横超院との親密な情報のつながりが垣間見える。
- (41) 『婦中町史 資料編』86頁掲載の第121図「石器絵図」(浅野家文書Ⅱ No.99-44)の石棒に「石質硬テ鉄ノ如 / 色鼠黒シ形ヒラメナリ」の記述、第123図「石器絵図」の欠損した石棒に「石質粗ニテ色青鼠ノ形ヒラメナリ」の記述がある。同図での寸法の書き方でも、『玄経集』の写真(2)に見られるものとよく似た点が見られる。
- (42) 「銅造帝釈天立像」(当館所蔵 国指定重要文化財)。富山県 [立山博物館] 平成25年度特別企画展「立山と帝釈天—女性を救うほとけ—」展解説図録に詳細な論考がある。小論での帝釈天像、及び帝釈天信仰に関する諸情報は当館主任加藤基樹学芸員からのご教示による部分が大きい。
- (43) 「立山と帝釈天—女性を救うほとけ—」展示解説図録53頁「岩峯寺の帝釈天と出開帳」参照。
- (44) 現在でも信仰や観光の対象になっているものでは、住吉大社(大阪住吉区)には、丹後局がここで産気づいて、大きな石を抱いて島津忠久を出産した説話を持つ誕生石や静岡県駿東郡小山町には和泉式部誕生石などがある。
- (45) 鎌田久子・宮里和子・菅沼ひろ子・古川裕子・板倉啓夫『日本人の子産み・子育て』(勤草書房、1990) 132～143頁参照。
- (46) 静岡県文化・観光部文化政策課「ふじのくに文化資源データベース」<https://www.fujinokunibunkashigen.net/> 参照。
- (47) 地元の三浦郡のことを記した地誌『三浦古尋録』(文化9年)下巻には「○秋谷村 / 曲輪ノ浜ニ子産石云々有年此石ヨリ石ヲ分出ス故ニ子産石ト云フ」とある。『玄経集』には「諸国奇石」と項立てして奇石を列挙した中に「相模 三浦郡秋谷村 子産石」の記述とスケッチを収載し「雲根志に吸石トアリ」とメモの加筆がある。しかし『雲根志』前編卷之二には「吸石 相模国三浦にねずみ色なる常体の石あり 此石を破碎て諸腫物に付る忽ち膿をすひ出してすなはち治すと 予是をもとめ見るに下品の雑石なり (後略)」とあるのみで、子産石の伝承には触れられていない。
- (48) 『袖川村誌』(袖川村教育会、大正6) 161頁参照。「白山神社所蔵の石器を里俗誕生石と称す初、水月庵の所蔵なりしが、後、天満宮に移し、同宮の白山社に合併せらるるに及び、白山社所蔵となれり。昔は、出産に靈験なりとの迷信ありて、之を信仰する女人もありき。」とある。水月庵は当時現地にあった尼寺で、現在は無い。
- (49) 三好清超・大下永『飛騨市文化財調査報告書』(飛騨市教育委員会、2019) 137頁参照。
- (50) この誕生石は現存する。大岩山日石寺の愛染堂に安置して公開されており、当時と同じ趣旨で信仰の対象となっている。
- (51) 富山県 [立山博物館] が岩峯寺多賀坊から寄贈を受け調査整理した民俗文化財の中に、雄山頂上の社殿に祭祀されていたと伝わる什宝類の一部とともに水晶、磨製石斧などが混在して保管されていた。これらも信仰に使われた石器の可能

性が想像されるが、詳細は今後の研究を待つ必要がある。

- (52) 「帝釈天さま」(白川町ふるさと研究会編『ふるさと白川 第3号』白川町中央公民館、1970) 所収。白川町坂ノ東の安産神社では、帝釈天を安産の守護神として祀っているが、江戸時代までは同じ地区にある広通寺と、神仏が習合されていた経緯があると見られる。現在でも安産神社では毎年2月に安産祈禱祭が催されている。
- (53) 「民衆信仰を表徴する立山の護符」(富山県[立山博物館]平成6年特別企画展「立山信仰—祈りと願い」展示解説図録) 参照。



写真1「池田嘉助蔵の石器」『神代石之図』（関西大学図書館蔵）
 （関西大学デジタルアーカイブ〈https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka_gadan/206523068）より転載）

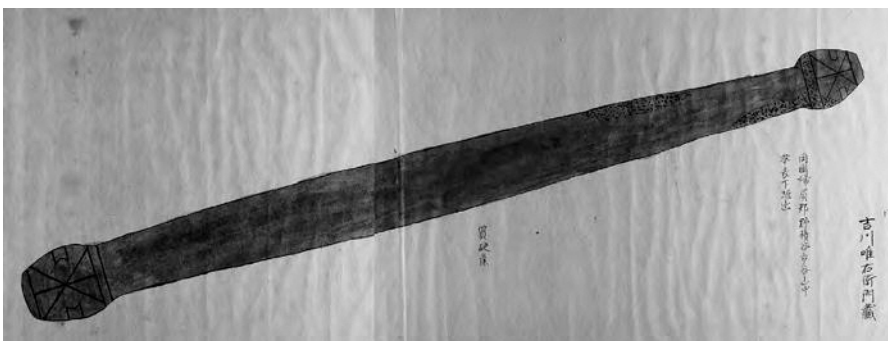


写真2「吉川唯右衛門敬明蔵の石器」
 『神代石之図』（関西大学図書館蔵）
 （関西大学デジタルアーカイブ〈https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka_gadan/206523068）より転載）

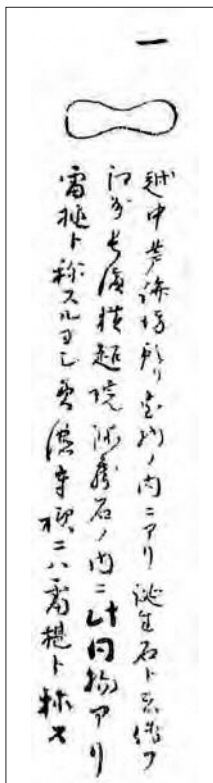


写真3「越中芦峯坊預り 誕生石」
 『玄経集』（飯田市立中央図書館蔵「市岡文書」）

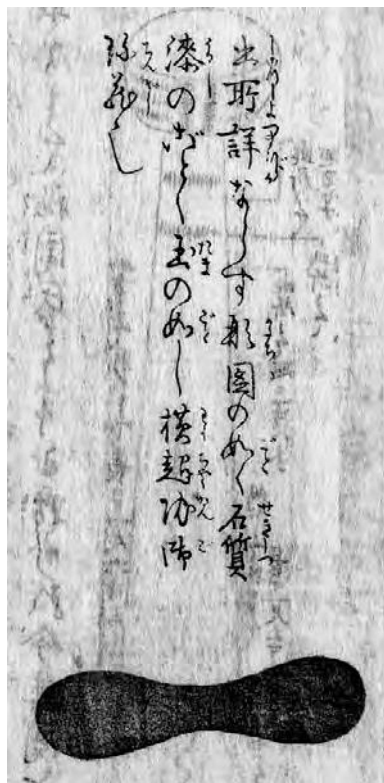


写真4「横超院珍藏品」『雲根志三編』
 付録「諸家所蔵神代石図」
 （国立国会図書館デジタルライブラリーより転載）

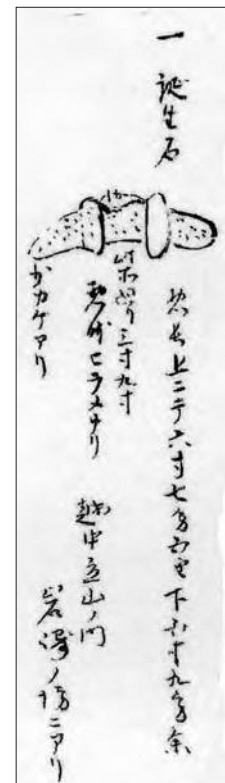


写真5「岩峯坊 誕生石」『玄経集』
 （飯田市立中央図書館蔵「市岡文書」）



写真6「同 立山別山 帝釋天什寶」
『神代石之図』
(関西大学図書館蔵)
(関西大学デジタルアーカイブ
〈https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka_gadan/206523068〉より転載)



写真7「越中 蘆辨坊預 誕生石」
『天下諸名家所蔵之奇石異物図』(原孝昭氏蔵)
飯田市美術博物館図録『江戸時代の好奇心』より転載



写真8「越中立山 岩崎坊 誕生石」
『天下諸名家所蔵之奇石異物図』(原孝昭氏蔵)
飯田市美術博物館図録『江戸時代の好奇心』より転載

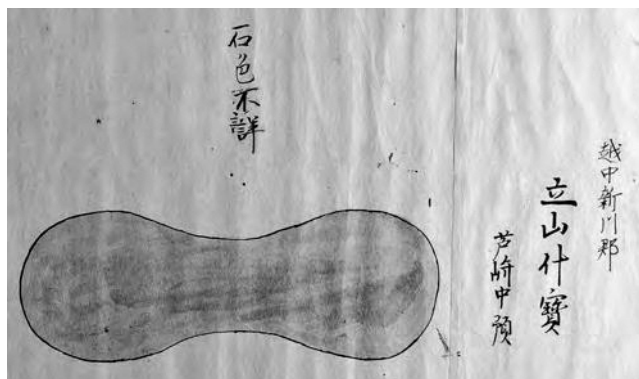


写真9「越中新川郡 立山什寶 芦崎中預」『神代石之図』(関西大学図書館蔵)
(関西大学デジタルアーカイブ 〈https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka_gadan/206523068〉より転載)

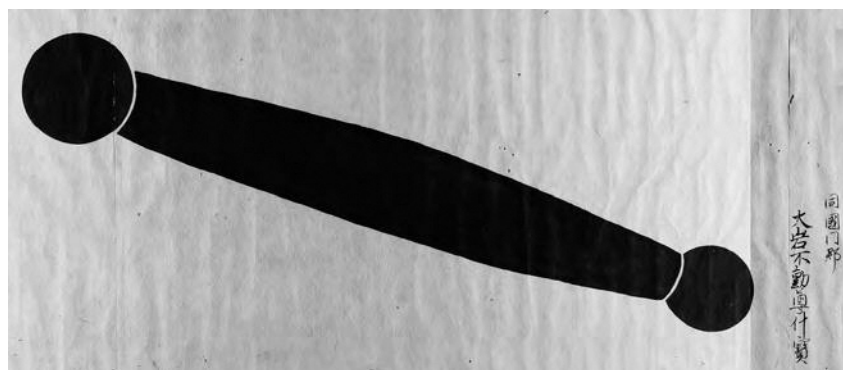


写真11「同國同郡 大岩不動尊什寶」『神代石之図』(関西大学図書館蔵)
(関西大学デジタルアーカイブ 〈https://www.iif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/osaka_gadan/206523068〉より転載)

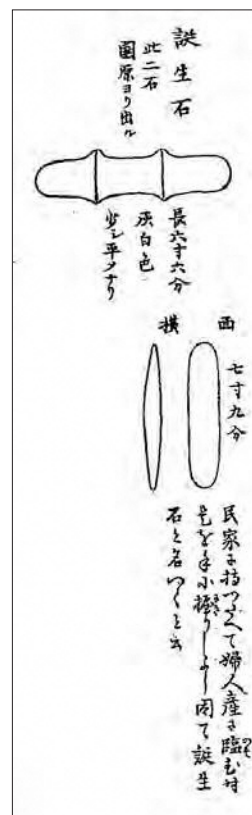


写真10「市岡智寛所蔵の誕生石」
『信濃奇勝録』
(国立国会図書館デジタルライブラリーより転載)